プロフィール紹介

谷本理は、1982 年東京に生まれる。フィレンツェ在住の洋画・版画家。1991 年大晦日にソビエト連邦が解体すると共にグローバル化が加速する時代の子供として、青春期を東京で暮らす。高校時代に、美大進学を美術教師から勧められ、また憧れに思っていたものの、2001 年早稲田大学入学。その後、演劇・映像を学内外で活動。そして、中退。2005 年にテンプル大学日本校に入学。その頃、学外でも、絵画の習得に励み、テンペラ画法を学び、またルネサンス・バロック絵画の模写をしている際、それらの作品の聖なる要素に強く惹かれる。2008 年、イタリアのフィレンツェに留学。2010 年マリースト大学修復学士を取得するまで、フレスコ画・テンペラ画また洋画古典的油絵技法を学ぶ。同年秋、フィレンツェのロシア芸術学院に入学。2014 年卒業まで、ソビエト連邦の教育で保存されてきた 19 世紀のヨーロッパで主流であった、写実的・印象派的・アカデミック芸術の習得に励む。卒業作品「放蕩息子の帰還」は、イタリア、カルピの大司教区が 2015 年に購入した。国際的な巨匠たち、セルゲイ　チュビルコや冉茂芹の元で就学する機会は、彼の画家人生を大きく変えるものとなった。

また、絵画修業の冒険の中、思いもよらず、彼の人生を変える精神的な恵みを受ける。2010 年に、フィレンツェのカトリック教会で洗礼を受けた。

2013 年から 2017 年まで、イタリア、フィレンツェの聖芸術学校で素描・絵画教員を務め、その後、自分の工房で絵画教室を続ける。2014 年美大卒業後、キリスト教聖絵画制作の注文を中心に国際的な芸術活動を続ける。個展をイタリアのフィレンツェ（2015・2022）、フランスのリオン（2017）、台湾の台北（2020）と、国際的に開催。彼の作品は、４大陸、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカにて購入されプライベートに展示されており、また、絵画作品「悲しみと希望の聖母」は、1945 年、長崎における原爆被害者たちを思いしのぶために作られた、浦上教会内にある被爆マリア礼拝堂に設置されている。

2020 年、コロナ禍が社会の流れを大きく変え、一方デジタル化がさらに加速する中、自分の芸術を新たに見直す。2021 年フィレンツェ CR 基金からの奨学金を受け、版画芸術を国際グラフィックスクール、ビゾンテで修学。日本版画と日本版画芸術家の美を再発見する。そして、2022 年、カラッラ芸術学院の修士課程で、デジタル彫刻と現代美術の習得を開始。2024 年、卒業予定。この間も、国際的な顧客に向け注文作品の制作を続ける。

日本・アメリカ・ロシア・イタリアでの芸術教育を通して、彼は、国際化した現代芸術界の中で自分の作品、または生き方を『芸術的職人』という観点で捉え直す。グローバルな対話の中に生まれる職人的美感覚を独創的に解釈していきたい。